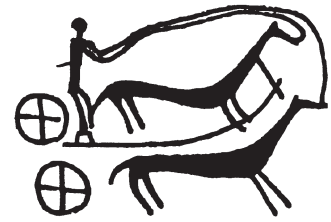


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 65



G P A ・ 上限設定 ・ 成績評価等について (4 ページ)

T A 研修会開催される (11 ページ)

北海道大学公開講座の日程決まる (15 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

地域連携の新たな局面と大学の生涯学習機能

生涯学習計画研究部長 教授 町井 輝久

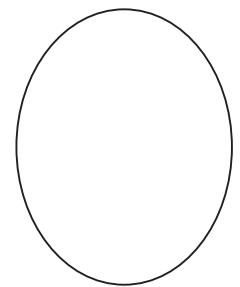
はじめに

知識基盤社会を迎え、大学と地域社会の連携は新たな段階に達しています。研究開発の面ではもちろんのこと教育面においても、University-Community Partnership といえることが言われるように、どちらかが一方的にサービスするのではなく、双方にとって win-win の関係であり、同時に「協働」の持つ意味の重要性が増しています。

生涯学習計画研究部も、公開講座等のパートタイムの社会人教育の拡充、本学学生のキャリア教育、北海道の地域生涯学習への支援、生涯スポーツ科学の開発・普及等の実践的な研究を一層発展させるとともに、北海道大学がわが国を代表する主要拠点研究大学であり、北海道唯一の総合的研究大学である

という特性を生かし、高度で先端的な生涯学習の拠点として北海道及び日本の発展のための人材づくりの実践的な研究を通して、本学中期計画の達成に寄与することをめざしています。研究部は「北海道大学の生涯学習機能を高める」

研究と実践的な活動をすすめることを目的に設置されました。同時に大学教育にも地域の資源を積極的に活用することによって、学生たちが教えられた知識の吸収者ではなく、アクティブに学び続ける存在としての Lifelong Learners に育てることもますます重要になっています。



知識基盤社会における大学ー地域及び産業との連携は今新しい局面を迎えています。そのことはOECDが提起する学習地域(Learning Region)における大学の役割が「大学のもつ教育資源と地域の持つ資源を、生涯学習者の育成という視点から統合的にとらえられている」ことにも関わります。そこで、生涯学習計画研究部では、生涯学習のための教育サービスは成人学習者のためだけではなく、大学で学ぶ学生を生涯学習者として育てることが大学の教育機能としてますます重要になるという考え方に立って、大学の一般教育を生涯学習者育成の場として位置づけ、キャリア教育の体系化にむけ積極的に関わってきました。

このような実践的活動を続ける中で、欧米の大学の生涯学習への取り組みを見てきましたが、大きな衝撃を受けたのは、本学の姉妹校であるポートランド州立大学(PSU)を訪ねた時でした。PSUは1990年代はじめから「都市型研究大学」の構築をめざし、大学のあらゆる活動において地域連携を強める改革を進めていました。教育においては地域連携を活用した学習活動(Community-Based Learning)に力をいれ、高い評価を受けていました。“University Studies”と呼ばれる新しい教養教育は、「生涯学習の基礎となる知識、能力、態度を育てること」を目標にかかげ、4年次生には地域の学校や自治体、NPOなどと連携した「卒業プロジェクト」に取り組むことを義務づけていました。

以上のような10年間の実践的調査研究の成果を踏まえ、生涯学習計画研究部の今後の活動は、「大学の生涯学習機能を高める」という目的を、地域社会の生涯学習活動への貢献という視点と地域との連携により学生を生涯学習者として育てるという視点に統一して進めることにしています。大学教育において、大学と地域社会とのパートナーシップを開発するという基本的視点に基づいて次の4点の活動を、大学ー地域連携の新しい局面を踏まえて、本学の中期目標の達成と関わり、本学の生涯学習機能を高めるための課題としたいと考えています。

1. 公開講座をセカンドチャンスに挑戦する人々の学習機会として拡張

生涯学習計画委員会の議論を踏まえて、2005年

度から本学の公開講座は教養型と専門型の二つの内容を持った講座に分けて実施することになりました。受講料体系も2本立てです。専門型は専門的職業分野での先端的な知識やスキル、職業人として必要な企画力や思考力を学ぶ講座で、大学院レベルの学習機会や本学教員と社会人学習者が職業分野の課題についてワークショップのような方式でともに学ぶあり方などが開発されています。

前者は工学研究科が、昨年から大学院共通講義を技術者等を対象とした公開講座として開放し、後者は教育関係行政職員のスキルアップをめざしたセミナーとして行われています。本年度は病院が看護職の研修講座を専門型講座として実施します。将来専門型講座受講修了者に対して、職業生活で役に立つような学習証明(Certificate)を発行することも検討する必要があるでしょう。

また高齢社会を迎え、20年以上の高齢期を過ごすことになる高齢者の学習ニーズに応えた高齢者を対象とした新しいタイプの公開講座も求められています。現在、欧米のエルダーホステルのようなツーリズムと一体化したシニアサマーカレッジについて旅行業者と研究中です。

多くの成人学習者にとって2年あるいは4年というフルタイムでの大学での学習は困難が多いようです。パートタイムの学習機会を社会人学習のニーズに応じて展開することがますます求められることになるでしょう。北海道大学が総合的な研究大学にふさわしい公開講座を開発発展させることが必要です。

2. Community-Based Learning の展開

2004年度から本学において正課科目としてのインターンシップが全学教育をはじめ、学部教育・大学院教育で広がっています。2005年度からはキャリアデザインなど新たなキャリア科目が、これまでの特別講義「大学と社会」に加えて、はじまりました。インターンシップとともに学生たちが社会での体験的な学習を通して自分の将来のキャリアを考えながら、自分の学びをつくり意欲を持って大学での学習を行うことを目標としています。

今欧米ではService Learningに取り組む大学が増えています。ボランティア活動をはじめ学生が様々な社会活動に参加することを通して、責任ある市民

性を身につけるとともに、様々な人々と協働する力等を養うことが求められています。本学でもキャンパスツアーなどに参加する学生が増えています。

全学教育は専門教育のための準備の教育ではなくて、専門教育を活かす教育です。課題発見・解決型思考、自分の専門を生かす進路探索、専門を実社会の中で活かす考え方、違った専門分野との協働（チームワーク）そして市民として自分の専門を通して社会で役割を果たす力を育てることが、全学教育に求められています。こうした力を養うために全学教育に Community-Based Learning の考え方をより広げる必要があります。教えられた知識の吸収者でなく、アクティブに学び続ける存在としての Lifelong Learner を育てることが全学教育の目標といっても良いと思います。

3. 大学と地域が連携した地域づくり生涯学習への参画

研究部発足当初は「リカレント教育推進事業」を中心に大学の持つ知的資源を、公開講座や大学放送講座、衛星通信を利用した公開講座などによって、地域住民の学習機会として活用する教育サービスの拡張に力を注ぎました。このような活動を続ける中で、公開講座等を単なる大学から地域への一方通行のものとして位置づけるのではなく、大学の研究者が地域課題と向かい合い、地域の住民とともに学習するあり方へ発展させる必要があることが明らかになってきました。

私たちは北海道の発展を担う人づくり・地域づくりに大学の生涯学習機能が積極的に貢献する仕組みとして、道内の大学・短大等が連携し行政機関、産業界、NPO などの民間団体と連携した生涯学習システムである、道民カレッジ・さっぽろ市民カレッジの立ち上げに積極的に関わり、職業人の再教育、地域づくりと結びついた学習機会の提供に努めてきました。知事を学長とし、本学総長を副学長とする道民カレッジの受講生は、この5年間に約2万人に達し、北海道大学をはじめ道内8大学が参加する大学放送講座など、広い北海道の地域性に合わせた学習

機会の拡大に努めています。2005年度からは道民カレッジの学習の大きな柱に「ほっかいどう学」をおき、北海道の歴史、文化、自然、産業、環境、生活、芸術、スポーツなど様々な分野について学ぶことを通して一人ひとりの道民が北海道の地域づくりの様々な活動に参加できるような学習活動に取り組むようになりました。「ほっかいどう学」に関わる連携講座も60を越え、12の市町村で「ほっかいどう学出前講座」が開かれることになっています。ほっかいどう学の普及・活用と関わって「ほっかいどう学検定」も検討されています。

このほっかいどう学の体系化に、本学の教員が専門的立場から積極的に関わっていただけることを期待しています。同時にこのようなほっかいどう学の学習に本学学生も参加することはできないかと考えているところです。

4. 第2回社会人大学院生の学習環境調査

本年度の研究活動の一つとして、本学で学ぶ社会人大学院生を対象として「第2回社会人大学院生の学習環境に関する調査」研究会を立ち上げ、調査分析を実施することになりました。本学では、約500人の社会人が大学院で学んでいます。各研究科によって学ぶ目的も、学び方も異なっていますが、履修環境、カリキュラムのあり方、論文やレポートの作成、図書館や事務の利用環境、それに働き続けながら学ぶ社会人にとっては、勤務先の条件や家庭生活など多くの課題があることが5年前の調査でも明らかになりました。それをもとにした本学の125周年記念シンポジウム「社会人大学院生の学習環境についてのシンポジウム」では多くの社会人院生から意見が出ました。第1回調査から5年経過した本年あらためて社会人大学院生の調査を実施し、社会人学生が本学大学院において実り多い学習を進めることができるよう、本学が改善すべき課題について探りたいと考えています。全学の教職員の方々のご協力をお願いいたします。（なお第1回調査について関心のお有りの方は私までご連絡下さい。）

GPA・上限設定・成績評価等について（雑感）

経済学研究科 教授 岡部 洋實

はじめに

自分の学生時代を振り返ってみたが、成績の基準など明示された記憶はない。つられて、合否がわかるまで不安を余儀なくされ、何故その成績なのか、何が足りないのか、こちらから教官のところに出向いても明瞭な答えを頂戴できなかったことを思い出した。さらには、単位を早く修得してしまおうと登録科目数を増やしたところ、定期試験が近づくにつれて準備に四苦八苦しなければならなかったことも思い出されてくる。

本年度から実施された全学教育を中心とする改革は、「社会に対する教育の質の保証」とか「国際化への対応」などといった理念は措くとして、自分がかつて学生として味わった不快さを解消しう方向に大学が向かっていることの、一つの証しにはなるであろう。具体的方策の提示にあたって、種々多くの論議のあったことは学内周知のことであるし、何よりも、『「秀」評価、GPA制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について（Q&A）』と題されたパンフレットが発行されなければならなかったことに、改革の具体化のために膨大なエネルギーが費やされたことが物語られている。具体化の作業を実際に担われたWGの諸先生・事務職員の方々には敬意を表したい。

とはいえ、今後も関連する手直しが続くと思われるから、雑駁な思いつきではあるが、この場を借りていくつか述べさせてもらうことにしよう。

多様な評価

まず、各学部のカリキュラムがその専門性に依じて異ならざるをえないことに加えて、学生の志望や関心もまた多様であることを考慮すると、一律の尺度で学生の能力や意欲を測るのには無理があるし、そうして出された評価には慎重に臨まなければならないだろうことをあげておきたい。これは、履修する科目数の制限に関しても同様である。

いくつもの学部・学科が何らかの意味で多様な学生を求めていることからすれば、同一の教育を受け

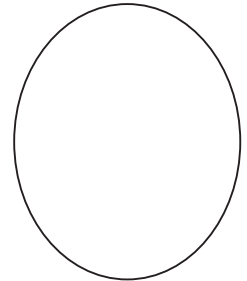
たとしても、学部・学科間のみならず、それぞれの中においても評価の結果にバラつきが出るのは不自然ではない。学ぶ目的や資質・関心などに依じて学ぶべき事柄やその達成度には違いが生じうるし、それらを相互に比較するのも

容易ではない。加えて、大学が多様な人材から構成される世界であろうとするなら、学生の受ける評価もまた多様でありうる。簡単な算式で得られるGPAは評価の一例であって、大学全体・学部・学科・講座・教員等々によって多様な評価がなされていることは、学生を含む大学の構成員はもちろんのこと、企業や官公庁、あるいは高等学校などに理解されている必要がある。GPAの公表に際しては、そうした点に配慮がなされてしかるべきだと思う。

幅広い学習機会の提供

次に、実際問題として、GPAの一人歩きは、これに反映されない能力や資質・意欲を、稀に学生自身に見失わせる虞れなしとはしない。例えば、経済学部の学生が経済や経営を学ぶのに必要な知識を一通り身に付けるのは当然として、GPAの高得点を狙うあまりに、彼／彼女が直接関連しないが関心のある分野の学習を軽視してしまうことは、大学として願うことではない。また、専門課程の立場からすれば、その課程に進学する全ての学生に必要な基礎的学修を要求しなければならないのだが、学習意欲や知的好奇心の喚起に視点を移せば、成績の良い者だけが幅広い学習の機会に浴するというのには到底与しえない。「総合大学の利点を生かした幅広い学習」の機会を学生自身が享受しようとする際に、ルールが足枷になるようなことがあってはならないだろう。

新たなルールは、学生にとってはもちろんのこと、教員や事務職員にとっても煩瑣にならないようにすべきだという点も挙げておきたい。例えば、履修登録単位数の上限設定における「特例措置」や、今後



導入が予定されているGPAの「パス／ノンパス」制度は、どう適用してもらうかどう利用するかなどをめぐって、学生に煩瑣な判断や手続きを求めることになりうるし、ときにミスを誘導しかねない。指導する側にとっても同様である。これらの方策を真つ向から否定するつもりはないが、学修に関わるルールや手続きは、できるだけ簡素であるのが望ましいのではなかろうか。

空き時間の活用

もう一つ。履修登録単位数の上限設定などは、学生の生活のあり方を変える可能性を含んでいる。というのは、登録科目数が多いために十分な学修を達成できないといった事態は抑制されようが、他方で、増えた授業の空き時間をどう利用するかという問題が、現に生じているからである。また、ある学期に修得単位数を稼ぎ、続く学期はもっぱら課外活動に充てるというようなこともできなくなる。そうであ

れば、ときには数コマ分にもなる時間割の空き時間を勉学へと誘導し、「単位の実質化」に繋げる工夫が、これまで以上に必要となろう。それに合わせて、学生の居場所としての図書館や学習室などを充実させることが、いつそう求められるかもしれない。

実はこの、学生を誘導すること、それも、一部の学生だけでなく全体的に勉学へと誘導すること、当たり前ではあるのだが、これが一番難しい。現在の学生が、私たちのころに比べて、まじめで課題にもよく取り組むように思われるのは、大学全入時代とまでいわれる中で、大学での学習や活動をないがしろにできないという気持ちをはたらいているからかもしれない。その真偽は私にはわからないが、実施に移された一連の方策が、より多くの学生を、課題をこなすだけでなく、より自主的な勉学へと誘導する制度的な枠組みとして効果的に機能することを願うばかりである。

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告 (第61回～第63回)

第61回(平成17年度第3回)

平成17年12月12日(月)に第61回(平成17年度第3回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合いました。

- 議題1. 北海道大学全学教育科目規程の一部を改正する規程(案)
- 議題2. 大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修を全学教育科目の授業科目の履修とみなす場合の取扱い要項(案)
- 議題3. 平成18年度以降の教育課程
- 議題4. 平成18年度全学教育科目の開講計画
- 議題5. 平成18年度全学教育科目に係るT・A
- 議題6. 平成18年度全学教育部の行事予定
- 報告事項1. 平成17年度第2学期の履修調整
- 報告事項2. 平成17年度第2学期の履修者数

報告事項3. 平成18年度全学教育科目のシラバスの作成

報告事項4. 平成17年度第1学期の成績評価分布状況

18年度以降の新教育課程・単位の実質化

議題1では、平成18年度以降の新教育課程及び履修登録上限設定(単位の実質化)の実施に伴う全学教育科目規程の一部改正が了承されました。

- (1) 1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること。
- (2) 新教育課程に沿った科目区分・授業科目の新設・廃止・名称変更。

TOEFL, TOEIC, 英検等の成果に基づく英語単位「優秀認定」制度

議題2では、TOEFL(530点以上), TOEIC(680点

以上), 英検(準1級以上)等の成果に基づく英語単位「優秀認定」制度の取扱い要項が了承されました。

履修登録上限設定・特例措置・パス・ノンパス(P/NP)科目

議題3では, 平成18年度以降の新教育課程及び履修登録上限設定について, 以下が了承されました。

- ・各学部の新実行教育課程表。
- ・17年度以前入学者への翌期再履修制度の適用は18年度2学期からとする。
- ・18年度入学者の第1年次における各学部の履修登録上限設定単位数(原則として文系21単位以下, 理系23単位以下), 及び1学期の成績優秀者に対する特例措置(GPA算入単位数が10単位を超え, かつGPA2.30以上の者は2学期に各学部の履修登録上限設定単位数より4単位多く履修登録できる制度)の実施が決まった。
- ・17年度2学期の履修者数のデータで, GPA制度の実施に伴い, 一般教育演習等の選択科目で履修者が急減する傾向が見られたので, 「パス・ノンパス(P/NP)制度」(特定の科目(体育学(実技), 情報学等)について5段階の成績評価を行うが通算GPAには算入しない制度)の導入を検討する。
- ・専門系の物理学・化学・生物学にも, 18年度2学期から翌期再履修クラスを設定し, 2年次1学期以降に他学部の互換性科目(専門科目)を再履修に利用することも可能な限り認める。

18年度開講計画

議題4では, 平成18年度全学教育科目の開講計画が了承されました(開講数は4月はじめの確定値)。

(1) 主題別科目(旧「分野別科目」)

- ・履修登録上限設定等を考慮して, 文系部局には主題別科目を20%程度減らし, その分を外国語演習の充実にあてるよう依頼し, 1学期に97(前年度128), うち論文指導30(同33), 2学期に98(同85), うち論文指導25(同23)科目を開講。

(2) 一般教育演習

- ・1学期に98(前年度107), 2学期に67(同63), 合計165(同170)科目を開講。
- ・フィールド体験型演習は14(同13)科目。
- ・OB教員担当は8(同14)科目。

(3) 論文指導

- ・文系部局には主題別科目の30%を論文指導とするよう, また一般教育演習は理系部局担当も含めて原則としてすべてを論文指導とするよう依頼し, 主題別科目で55(前年度56), 一般教育演習で65(同37), 計120(同93)科目を開講。

(4) 総合科目(旧「複合科目」)

- ・前年度より2増, 60科目開講。
- ・創成科学共同研究機構等には, 一般教育演習総合科目の開講を, 引き続き働きかける。
- ・主題別科目, 総合科目, 一般教育演習については, 開講学期, 曜日・講時を調整し, 履修登録上限設定等を考慮して, 後期に重点的に配分した。

(5) 外国語演習

- ・英語演習82(うち言語文化部以外の部局の担当20), その他の外国語演習134(うち言語文化部以外の部局の担当9)科目を開講。
- ・当初主題別科目, 総合科目, 一般教育演習として開講予定の8科目を外国語演習に振り替え, 開講責任コマ数等で不利が生じないように, 「各部局の授業担当状況」表では, これらの授業は当初予定の科目として算定することとした。

(6) 非常勤講師の削減

- ・科目責任者会議で調整し, 18年度に103, 19年度に100コマ削減の計画を作成した。
- ・18年度の削減数は, 文・理学部の主題別科目で3, 一般教育演習(OB教員担当)で6, 教育学部の体育学で2, 工学部の情報科目で31, 言語文化部の英語で5, その他の外国語で13, 合計18, 理学部の数学で8, 理科基礎科目(実験を含む)で35コマ。
- ・関連して, 言語文化部担当の主題別科目を3科目減らし, その分外国語科目の担当数を増やした。
- ・自然科学実験の新設に伴い, 18年度に限り, 基礎科目(講義及び実験)への全学支援の増加(物理学3, 化学5, 生物学2を医学部2, 薬1, 工5, 農1, 水産1(×2コマ)で担当)を依頼した。

TAの増加と研修の充実

議題5では, 18年度以降の新教育課程, 新科目の導入に伴い, TAの申請数が大幅に増加したため, 必要な理由を精査して一部は認めないこととし, 一部

は特色 GP 経費で支出する等の方策をとる一方、TA マニュアルを全面改訂し、TA 研修会の充実を図ることが了承されました。

17 年度 2 学期の履修者数

報告事項 1, 2 では、平成 17 年度 2 学期の履修調整の結果と各科目の履修者数が報告されました。

- ・一般教育演習では開講数・履修者数が、10 月の登録で 61 科目 767 人(前年度 59 科目 969 人)、空き定員は 627(同 243)人、1 月募集のフィールド型演習で 2 科目 50 人(同 2 科目 50 人)となった。
- ・大講堂の授業では、2 科目で履修許可票配布による調整を行い、うち 1 科目で定員(450 人)を超えた。
- ・分野別科目・一般教育演習の論文指導は、42 科目 688 人(同 43 科目 775 人)となった。履修者が 35 人を超えた論文指導授業が 3 科目あったが、おおむね担当教員による履修調整が定着してきた。
- ・一般の講義科目では、履修登録者が多数の場合も、すべて教室変更で調整がついた。
- ・分野別科目は 86 科目 6,501 人(同 110 科目 7,784 人)、共通科目は 90 科目 4,647 人(同 95 科目 5,026 人)、複合科目は 21 科目 3,299 人(同 21 科目 3,932 人)となった。
- ・一般教育演習、分野別科目、複合科目等で履修者が前年度に比べて 20～15%程度減少した。これは、17 年度から GPA 制度を導入した結果、学生に自主的な「履修登録抑制」の意識が働いたためとも考えられる。
- ・「論文指導」でない分野別科目の 1 クラスの平均履修者数は、思索と言語 60.8 人(6 科目 365 人)、歴史の視座 83.1 人(7 科目 582 人)、芸術と文学 68.4 人(12 科目 821 人)、社会の認識 132.7 人(21 科目 2,786 人)、科学・技術の世界 96.5 人(16 科目 1,544 人)、5 科目平均 98.4 人(62 科目 6,098 人)だった。
- ・言語文化部「外国語特別講義」(外国語 A・B 演習及び外国語 C と合同授業)の受講者は、英語 13 科目 454(うち全学教育科目履修者 279)人、その他の外国語 42 科目 688(うち全学教育科目履修者 477)人だった(前年度は、英語 18 科目 485(うち全学教育科目履修者 292)人、その他の外国語 47

科目 667(うち全学教育科目履修者 429)人)。

- ・履修者が 0 人だった 6 科目(分野別科目(論文指導)1, ドイツ語 1, フランス語 2, ロシア語 1, 中国語 1)は責任部局の開講コマ数から除外した。

17 年度 1 学期の成績分布の公表と評価の「極端な片寄り」の点検

報告事項 4 では、成績評価結果の公表と、評価の「極端な片寄り」について、成績評価・授業評価結果検討専門部会での検討結果が報告されました。

- ・16 年度 2 学期の成績評価に「極端な片寄り」があると見られる 16 科目について担当教員に事情を照会した結果、転出等で回答のなかった 3 科目を除いた 13 科目の回答が報告された。
- ・17 年度 1 学期の成績評価に「極端な片寄り」があると見られる 15(分野別科目 3, 外国語科目 9, 基礎科目 3)科目の担当教員に事情を照会する。
- ・17 年度 1 学期の成績評価分布状況表(授業科目別、授業科目・担当教員・クラス別)が 3 月に「北海道大学成績分布 WEB 公開システム」で公開された。
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/seiseki/GradeDistResult.aspx>

第 62 回(平成 17 年度第 4 回)

平成 18 年 3 月 2 日(木)に第 62 回(平成 17 年度第 4 回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合いました。

- 議題 1. 北海道大学高等教育機能開発総合センター全学教育委員会規程の一部を改正する規程(案)
- 議題 2. 北海道大学全学教育科目責任者等に関する要項の一部を改正する要項(案)
- 議題 3. 北海道大学全学教育科目ティーチング・アシスタントの選考等に関する要項の一部を改正する要項(案)
- 議題 4. 「科目等履修生」として全学教育科目を履修する場合の取扱いについての一部を改正する取扱い(案)
- 議題 5. 全学教育科目「追加認定試験」についての申合せを廃止する申合せ(案)
- 議題 6. 北海道大学附属図書館北分館委員会委員の

推薦

- 議題7. 平成18年度以降の教育体制
 議題8. 平成17年度全学教育科目の追加開講等
 議題9. 平成17年度全学教育科目に係るT・Aの任用予定
- 報告事項1. 北海道大学学部におけるGPA制度の取扱いに関する要項(案)
 報告事項2. 「秀」評価, GPA制度及び履修登録単位数の上限設定の実施(Q & A)(案)(平成18年度入学者用)
 報告事項3. 平成18年度新入生オリエンテーション及びクラス担任会議
 報告事項4. 平成17年度全学教育委員会の検討事項
 報告事項5. 平成18年度1学期の履修調整
 報告事項6. 平成18年度全学教育科目に係る既修得単位の認定
 報告事項7. 学科分属時期を変更する学部
 報告事項8. クラス担任アンケートの集計結果
 報告事項9. 一般教育演習(集中講義)の履修調整

議題1, 2, 3, 4では, 平成18年度以降の新教育課程の実施及び先端生命科学研究院の新設に伴う関係規程, 要項等の一部改正が了承されました。

議題5では, 18年度以降の新教育課程においては, ほぼすべての全学教育科目で「翌期再履修」が可能となり, GPA制度及び履修登録単位数の上限設定との関連で不整合が生じることから, 「追加認定試験」を廃止する申合せが了承されました。

履修調整の新方式

議題7では, 新教育課程の実施に伴い, 4月の授業1週目に行う履修調整の新方式が了承されました。

- ・一般教育演習, 外国語演習, 大講堂での授業について, 授業第2日正午までに希望調書を受付け。
- ・①英語演習, ②初習外国語演習, ③一般教育演習, ④英語・初習外国語以外の外国語演習, ⑤大講堂での授業の順に抽選で履修許可者を決定。
- ・授業2週目第2日朝に履修許可者を発表。
- ・定員に空きのあるクラスに追加登録を受付け。
- ・論文指導講義については, 1週目の授業で担当教員が履修調整を行い, 抽選による履修許可と重複しない限り履修を許可。

- ・以上の履修調整の後に履修届を受付け。

議題8では, 18年度開講計画の追加, 取消し, 変更等が了承されました。

- ・外国語特別演習で新たに開講されるフィンランド語, ブラジルポルトガル語, 広東語は, 17年度以前入学者向けには「思索と言語」として開講。
- ・「平成18年度全学教育科目における各部局の授業担当状況」が了承された。19年度以降に向けて, 理科基礎科目・自然科学実験, 外国語演習に係る全学支援・全学協力をどう評価・算定するか, 検討が必要。

TA採用予定大幅増

議題9では, 18年度のTA採用予定者(のべ719人(前年度比153人増), 25,349時間(同5,753時間増), 経費は32,703,750円(約736万円増)が了承されました。

履修登録上限設定・パス・ノンパス(P/NP)科目

報告事項1, 2では, 18年度からのGPA制度及び履修登録上限設定について, 北海道大学学部におけるGPA制度の取扱いに関する要項(案)及び「秀」評価, GPA制度及び履修登録単位数の上限設定の実施(Q & A)(案)(平成18年度入学者用)の内容が報告されました。体育学A及び情報学Iは「パス・ノンパス(P/NP)科目」とし, 5段階の成績評価を行うが通算GPAには算入しないことになりました。

GPA制度及び履修登録上限設定について, 詳細はホームページを参照してください。

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/GPAqa.html>

クラス担任会議・GPAを利用した修学指導

報告事項3では, 平成18年度新入生オリエンテーション及びクラス担任会議の日程・内容等が報告されました。

- ・クラス担任会議では, GPA制度及び履修登録上限設定について, 特に1学期のGPAを利用した修学指導について, その対象者を選び出す基準, 内容等について詳しく協議したい。

報告事項4では, 平成17年度全学教育委員会の検

討事項に沿って、この1年の全学教育委員会の活動が報告されました。平成18年度以降の新教育課程、GPA制度及び履修登録上限設定の実施等、大きな改革の準備が整いました。

報告事項6では、平成18年度全学教育科目に係る既修得単位の認定の詳細が報告されました。

- ・新教育課程、新科目の実施に伴い、審査対象とする科目、しない科目を整理した。
- ・4段階評価の「優」が5段階評価の「秀」に認定されることは多くないことを申請者に周知する。
- ・認定された既修得単位は、18年度以降の入学者については、学期GPAには算入せず、通算GPAには算入する。

報告事項7では、理学部、水産学部で、学科分属時期を、従来の1年次2学期末から、2年次1学期末に変更することが報告されました。

報告事項8では、昨年12月に行ったクラス担任アンケートの集計結果が報告されました。

- ・オフィスアワー、クラスアワーはそれなりに機能しているもので、さらに改善を図りたい。

報告事項9では、1月募集のフィールド型演習で2科目に118名の希望者があり、抽選により50人を選んだことが報告されました。

- ・18年度には、履修登録上限設定に伴い、集中講義の履修希望者が増加する可能性があるため、芸術科目の集中講義3科目もフィールド型演習と同じ時期に募集を行う。

第63回(平成18年度第1回)

平成18年4月28日(金)に第63回(平成18年度第1回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合いました。

- 議題1. 全学教育委員会小委員会の構成
- 議題2. 学生問題担当委員の選出
- 議題3. 平成18年度全学教育委員会の検討事項
- 議題4. 学期途中で休学した者に関する全学教育科目の成績評価の取扱い

報告事項1. 附属図書館北分館委員の推薦

報告事項2. クラス担任のオフィスアワー

報告事項3. 平成17年度高大連携科目に関する報告及び平成18年度実施予定

小委員会等の構成

議題1, 2, 報告事項1では、各委員がつぎのように決まりました。

○ 小委員会委員

理学研究院 小野寺彰

委員長(新任)・センター長補佐

文学研究科 安藤 厚 センター長補佐

公共政策学連携研究部

佐々木隆生 センター長補佐

言語文化部 大野公裕 センター長補佐(新任)

文学研究科 舩 和順(新任)

法学研究科 村上裕章(新任)

理学研究院 武田 定

医学研究科 吉岡充弘

工学研究科 野口孝博

言語文化部 吉田徹也(新任)

○ 学生問題担当委員

法学研究科 村上裕章

工学研究科 野口孝博(新任)

○ 附属図書館北分館委員

経済学研究科 佐々木憲介(新任)

農学研究科 川端 潤(新任)

議題3では、平成18年度全学教育委員会の検討事項(案)について、佐伯委員長、安藤センター長補佐から説明があり、各項目について小委員会で今後検討することになりました。

平成18年度全学教育委員会の検討事項

1. 中期目標・中期計画(平成18年度年度計画)の実施状況について
2. 「秀」評価及びGPA制度の実施(報告とQ & A)・履修登録単位数の上限設定・成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施・単位の実質化について
 - (1) GPA制度の検証
 - (2) 履修登録単位数の上限設定及び履修取消し制度の検証
 - (3) 成績評価基準の明示
 - (4) 成績評価基準の設定
 - (5) 成績評価結果の公表
 - (6) 成績評価の妥当性の検討
 - (7) 単位の実質化を進める授業方法の開発・FD等

3. 平成 18 年度以降の教育課程について

- (1) 新カリキュラムに対応したコアカリキュラムの充実
- (2) 教育改革室での検討状況を勘案した外国語科目及び外国語演習の充実(朝鮮語, スペイン語の追加, 外国語特別演習の充実等), 初習外国語科目の見直し
- (3) 情報科目, 文系基礎科目, 理系基礎科目, 自然科学実験等, 新科目の検証
- (4) 互換性科目の在り方
- (5) TA の活用・TA 研修の充実

4. 全学教育科目の充実について

- (1) 履修調整(抽選のシステムを含む)結果の検証
- (2) 18 年度カリキュラムに対応した開講時間帯の検証
- (3) 学部との連携: 互換性科目の検証, 外国語演習への言語文化部以外の部局の教員の参加の拡充, 「翌期再履修」クラスの検証等

5. 全学教育支援体制の構築について

- (1) 科目責任者会議の体制の検討
- (2) 責任部局の「責任コマ数」, 基礎科目等に対する「全学支援」, 一般教育演習・総合科目における「全学協力」について

6. 平成 18 年度以降の教育課程の実施に伴う教務事務体制について

7. シラバスの在り方について

- (1) 内容の充実
- (2) シラバスのペーパーレス化の検討

8. 新教務情報システムに係る要望事項について

- (1) 新システムにおける入力作業等に関する改善事項の検証
- (2) 教務情報システムとシラバスデータの共通化

9. 全学教育における施設・設備の充実について

- (1) S 講義棟, N1, N2 講義室, 大講堂への渡り廊下室, S 教官棟の整備・充実
- (2) 自然科学実験の実施に伴う実験室・設備等の整備
- (3) 視聴覚機材(OHP, 資料提示装置等)の整備

- (4) 新基礎科目パイロット授業のための施設・設備の充実

10. 履修指導について

- (1) 組織的な履修指導
- (2) クラス担任による指導
- (3) 履修相談, オフィスアワー, クラスアワーの充実
- (4) 個別指導の強化
- (5) GPA を用いた修学指導の検証

11. 流用定員解消に伴う全学教育について

12. 全学教育における非常勤講師について

13. 高大連携授業について

14. 「学生による授業評価アンケート」「コアカリキュラムアンケート」「学生生活実態調査」等の結果の活用について

15. 定期試験等のあり方について

学期途中で休学する場合の履修登録・成績評価の取扱い

議題 4 では, 18 年度からの「評価せず」の廃止に伴い, 学期途中(特に各学期の最後の 2 ヶ月)に休学する場合の全学教育科目の履修登録・成績評価の取扱いについて諮られ, 「不可」評価が記録に残り学生が不利益を受けることのないよう, 学期途中で休学する場合はその時点で履修登録を削除すること, すでに成績評価を受けていてそれを保存したい場合は次学期(10 月あるいは 4 月)から休学とするよう指導することが了承されました。

札幌旭丘高校と連携した高大連携授業

報告事項 3 では, 札幌旭丘高校と連携した高大連携授業の試行について, 平成 17 年度 2 学期に旭丘高校の 2 年生 5 名が一般教育演習 3 科目を聴講し, アンケートでは好結果だったこと(報告書参照), 平成 18 年度 2 学期にも聴講をさらに拡充して実施する予定で, 具体的な事柄については今後小委員会で検討することが報告されました。

(安藤厚 文学研究科教授・センター長補佐)

センター CENTER

TA研修会開催される —ほとんどの参加者が修了認定—

2006年度のTA研修会が、4月5日(水)にセンターの大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当するTAに対しては、当該授業科目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前に当該業務に関する適切なオリエンテーションが義務づけられています。本センターでは、平成10年度からTA研修会を実施してきており、今回で9回目となります。今年度の全学教育におけるTA採用人数は、延べ719名(対前年度比27%増)に達しました。TA

制度は広い意味の大学院教育の一環として導入された制度で、大学教員となるための実地訓練(教育現場の体験)のための制度ともみなされています。また、大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門についてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えるとはどういうことかを理解することになります。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する

表1. 平成18年度北海道大学全学教育TA研修会プログラム

<午前部>

9:30 挨拶 中村 睦男 総長
 9:35 講演 「北海道大学の全学教育」安藤 厚
 10:05 講演 「Teaching Assistant」細川 敏幸
 10:35 休憩
 10:45 ミニ講義 「大学教育の基礎について」
 西森 敏之
 11:00 パネル討論「TAの可能性～現状と理想」
 司会：細川 敏幸
 パネラー：栗原 正仁(情報科学研究科)、
 栗原 秀幸(水産科学研究院)、
 藤木 晶子(院生)、武尾 真(院生)
 12:00～13:00 昼休み
 13:00～13:30【N245】コーヒープレーク(自由参加)
 TA経験者との談話、藤木 晶子(院生)、武尾 真(院生)

<午後部>

A. 一般教育演習【N304, N231, N232, N242,
 N243】鈴木 誠, 池田 文人(高等教育機能開発総
 合センター)
 B. 一般教育演習(フィールド)【N304, N244】
 栗原 秀幸(水産科学研究院)

C. 講義【大講堂, N283, N270, N271, N272,
 N273】細川 敏幸, 西森 敏之(高等教育機能開発総
 合センター)
 D. 論文指導【N233】舂 和順, 川端 康弘(文学研究科)
 E. 情報学【情報教育館2階実習室(A, B, C)】布施
 泉, 岡部 成玄(情報基盤センター), 村井 哲哉(情
 報科学研究科)
 F. 英語IIオンライン授業【言語文化部210CALL教室】
 土永 孝(言語文化部), 上田 雅信(国際広報メデ
 ィア研究科)
 G. 英語II以外の英語の授業【言語文化部210CALL教
 室】奥 聡(国際広報メディア研究科)
 H. 中国語【言語文化部105室】李 明玉(言語文化部)
 I. 文系基礎科目【N234】鈴木 賢(法学研究科)
 J. 心理学実験【心理学実験室】和田 博美, 眞嶋 良全(文
 学研究科)
 K. 理系基礎科目【N208】小野寺 彰, 柄内 新(理学
 研究科)
 L. 自然科学実験【N302, 物理:N127, 化学:N227,
 生物:N217, 地学:N115】中原 純一郎, 川村 信人,
 熊谷 健一, 嶋津 克明, 小亀 一弘(理学研究科)

- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的，意義，全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術，心構え，教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA 相互の交流をはかる

午後の分科会の種類は昨年よりもさらに増え，12分科会となりました。受講者数の増加が予想されたため，今回から学部専門教育のTAは受講対象者から外すことになりました。参加者はのべ254名で，最後まで出席した研修修了者は243名となり昨年度に比べ修了者の比率は非常に高くなりました。受講者は昨年にも増して真剣に研修に取り組んでいました。

なお，今回配布されたテキスト「北海道大学ティーチング・アシスタント マニュアル」は，受講者だけではなく，すべてのTAおよびその教員に，後日配布されました。

分科会の報告

一般教育演習

今年的一般教育演習のTA研修会は34名の参加者があり，「フィールド型」と合同で実施しました。まず本研修のねらい及び小人数クラスでの学生のモニタリングといったTAの役割について説明を行いました。次に，インタラクティブな授業では不可欠なグループ学習をTAに体験的に学んでもらうために，そ

の基本についての解説を行いました。その後，TAが教育場面で必ず遭遇する基礎的事例，及び応用的事例をグループごとに与え，ブレインストーミングを通して現状の把握と問題の解決について話し合いを進めました。各セッションとも短時間でしたが，発表及び質疑とも熱を帯び，内容のあるものとなりました。

講義

講義分科会では最初の30分間で，全学教育第二系の近藤さんから，大講堂のAV機器の使い方や，出席カード，レポート用紙，印刷依頼の方法などについての説明がありました。次に30分程度で，講義TAの心得についてミニレクチャーを行いました。最後に10人程度の6つのグループに分かれ，TAが遭遇するかもしれない事例として「出席カードの配布方法」，「講義中の私語」，「講義中の内職」について，それぞれTAの立場からの対処法を1時間にわたり議論しました。約5分程度のグループ毎の発表では，TAとしての学生に対する対処に止まらず，教員との関係，教員のなすべきことにまで話題が及び，活発な討論が交わされました。

論文指導

論文指導分科会では，文学研究科TA10名，理学研究科TA4名，合計TA14名出席のもと，次のとおり，

研修が行われました。

<第1部> 13:30～14:10

論文指導とTA - 「思索と言語」の場合-

担当 舩 和順 (文学研究科)

<第2部> 14:10～14:50

論文指導とTA - 「科学・技術の世界」の場合-

担当 川端 康弘 (文学研究科)

<第3部> 14:50～15:30

総合討論 担当 舩 和順・川端 康弘 (文学研究科)

特に<第3部>では、<第1部><第2部>のレクチャーに対する質疑応答はもとより、出席者全員が参加して活発な意見交換がなされました。を通して、TAそれぞれが、論文指導という授業でのTA業務の内容や心得を理解するとともに、TAであることを自覚することができた点において、大いに成果が得られたといえます。

情報学

午後2時より、情報教育館2階の実習室にて、TA研修会の「情報」分科会を行いました。情報教育に関しては、高等学校で教科「情報」が履修されたことから、今年度より、カリキュラムが大幅に変更になります。

TA研修会では、まず、「情報学I」で行う内容を、情報基盤センターの岡部教授から説明いただきました。続いて、情報学のTAを行うにあたって必須である、情報基盤センターの教育情報システムの概要と使用方法について、研修を行いました。教育情報システムに初めて触れるTAが多く、このTA研修会が大変有意義であったことをご報告いたします。なお、本TA研修会の分科会は、大学院共通科目である「情報学教育特論」の講義も兼ねております。

英語

英語TAは、始めに午後1時より40分間合同で研修。英語授業のタイプの多様性を確認した後、それぞれの授業での大まかな役割を確認しました。ワークショップとして「担当の先生へ提言・サジェスションがある場合どうすればよいか」をテーマに、グループディスカッションと発表をしてもらいました。また、トラブルの際の連絡先などを確認をしました。その後、「英語II以外のCALL授業」のTAは、教員

と合同のCALL授業研修会に参加しました。CALL教室及びWebtubeの利用法の講習とデモ授業に参加し、質疑応答を行いました。「英語IIオンライン授業」分科会では、「英語IITA業務マニュアルver.1.0」を配布し、それに基づいてTAの業務内容（各週の業務の流れ、緊急時の連絡方法など）について詳しく説明しました。その後、オンライン授業で学生のサポートをするのに必要なコンピュータの操作やオンライン授業で用いる教材の実習を行いました。最後に、勤務時の集合場所、オンライン授業の行われるCALL教室に案内して場所と利用の仕方を確認しました。

中国語

中国語TA分科会はTA28名、教員4名で行われました。李明玉助教授はTAを採用した中国語クラスが94コマにのぼり、TAの各クラスでの役割がますます重要になっていることを示し、TAになるための心得を解説しました。次に授業の実践例をとり、授業前授業後の取り組みについて細かい指示が示されました。仕事の内容には・発音指導・会話指導・模範朗読・AV機器の操作などがあり、そのためにはテキストの構成・授業内容を熟知する必要があることを説明しました。また、何をおいても清潔感は欠かせないとし、身だしなみのチェック・ポイントを解説しました。最後に質疑応答をおこないました。その後必要に応じて一部のTAはCALL講習会に参加しました。

心理学実験

心理学実験分科会では、はじめに実験科目におけるTAの役割などに関するレクチャーの後、個人情報を含む実験データの取り扱いや、学生に対して心理検査の結果をどのようにしてフィードバックすべきかなど心理学実験実習に特有の問題、および実験実習一般に関する話題などを取り上げ、全体討論を行いました。特に、心理学実験実習に特有の話題については、参加した大学院生および教員を交えた積極的な討論が行われました。本分科会を通じて、参加者には、他の実験科目とは異なる心理学実験実習に特有の事情に対する理解を深め、TAとして従事することへの自覚や責任感を高めてもらえたと思います。

理系基礎科目

最初は「講義分科会」と合同で、全学教育第二係の近藤さんから、講義室にあるAV機器の使い方の講習と、出席カードやレポート用紙、印刷依頼の方法などについての説明を受けました。続いてN282室に移動しましたが、理系基礎科目の参加者は基礎物理学と基礎生物学だけだったので6名しかおらず、ちょっと寂しい分科会になりました。まず、小野寺先生から新しい指導要領で教育された新入生が入学してくる「2006年問題」に突入した本年から、理系基礎科目が北海道大学の教育の中でどのように位置づけになっているか、またTAが参加する基礎物理学と基礎生物学が特色GPというプロジェクトの一部として開講されていることなどについての説明を受けました。最後に、実際にTAが働く現場で起こることが想定される様々なケースについて課題が与えられ、個別にどのように対処していくべきかについて、一人ひとりに発表してもらいました。

自然科学実験

自然科学実験分科会は物・化・生・地の4学科の実験合同で約30分行い、実験のTAとしての一般的な注意・心構えが指導されました。その後各学科に分かれ、各実験の分科会として別個の指導が以下のようななされました。(中原 純一郎)

物理分科会では新しく始まる自然科学実験のテーマとその内容・安全等を講義し、その後実際に実験

を行うことにより実行上の問題点などを絞り出し、実際に講義を行って行く上での意思の疎通を教員とTAの間で図り、TAの役割が指導されました。(熊谷 健一)

化学分科会は、化学実験の担当者全員(本学教員、非常勤講師、TA)を集めての説明会を兼ねて、高等教育センター化学第一実験室で約2時間かけて行いました。実験内容の説明についてはすでに3月8日に行っているため、本分科会(説明会)では、主に実験の運営方法や成績の付け方に焦点を当てた説明を行いました。また、TAには安全ビデオをみせ、事故の予防や事故時の対処の仕方についての指導を行いました。(嶋津 克明)

生物分科会では、生物系実験全体について説明し、そのあと各実験テーマの内容・手順・安全上の注意について実際に用いる器具や材料を示しながら解説をしました。(小亀 一弘)

地学分科会では各実験テーマについての概要を説明し、いくつかのテーマについて学生からの質問や要望などTAに対して想定される対処例の紹介を行いました。特に地質巡検テーマでは、野外での実習という特殊事情から派生する点に注意を払うように説明がありました。しかし、実験テーマがまだ実際に走り出していないので、やや具体性に乏しく、これから事例・ノウハウを蓄積していく必要があることが話し合われました。(川村 信人)

生涯学習 LIFELONG LEARNING

北海道大学公開講座の日程決まる 「くらしを守る-安全と安心の科学-」

北海道大学の平成 18 年度公開講座は「くらしを守る-安全と安心の科学-」をテーマとして開催されます。昨年度の公開講座は「くらしが危ない-安全と安心の科学-」をテーマとして開催され、私たちの日常のくらしの安全と安心を脅かす事故、事件が相次いでおり、それらの一つひとつが他人ごとでは済ませることができなくなっているなかで、「安全と安心」を確保するための対処のあり方について多角的に学ぶ機会となり、たくさんの市民の方に受講していただきました。

今年度は昨年度のテーマをさらに発展させ、環境の汚染や自然環境の変化、グローバル化の

深化などにもなつて、わたしたちのくらしの安全を脅かす新たな問題がどのように生じているか、それらを解決して安全な生活を守るにはどうしたらよいかを、本学における最先端の研究成果を踏まえて講義します。

会場は情報教育館 3 階スタジオ型多目的中講義室です。受講申し込み期間は、6 月 12 日～27 日で、受講料は 5 千円ですが、1 回のみ受講も 1500 円で可能です。申し込み及び問い合わせは、高等教育機能開発総合センター学務部教務課大学院係（電話・fax 011-706-5252）にお願いいたします。

表 2. 平成 18 年度北海道大学公開講座の日程

回/月日	演 題 および 講 師
第 1 回 7 月 3 日	人獣共通感染症の克服戦略—インフルエンザを例に— 獣医学研究科 喜田 宏 教授
第 2 回 7 月 6 日	野生動物と人間—闘争的共存時代の幕開け— 獣医学研究科 鈴木正嗣 助教授
第 3 回 7 月 10 日	海洋における藻類増殖と金属 水産科学研究院 久万健志 教授
第 4 回 7 月 13 日	建築と地震 工学研究科 滝澤春男 助教授
第 5 回 7 月 20 日	くらしを守るワイヤレステクノロジー 情報科学研究科 小川恭孝 教授
第 6 回 7 月 24 日	個人情報をはかに守るべきか 法学研究科 村上裕章 教授
第 7 回 7 月 27 日	わが国の医療制度を考える 経済学研究科 小山光一 教授
第 8 回 7 月 31 日	積雪寒冷期に有効な健康ウォーキング 高等教育機能開発総合センター 川初清典 教授

各回とも、午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分（講義時間 90 分、質疑 30 分）

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

今年度も高校生の全学教育科目聴講を試行

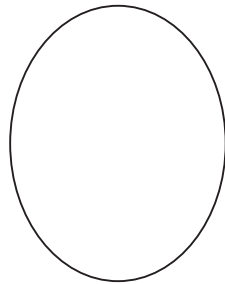
大学全入時代を迎えて、高大連携に対する期待はますます大きくなっています。「高大連携科目に関する研究会」(入学者選抜研究部・生涯学習研究部)は、2004年度から高校生による全学教育科目の聴講を試行し、教養教育を活用した高大連携の在り方について検討しています。2005年度第2学期は、札幌旭丘高等学校の2年生5名が一般教育演習3科目を聴講しました。意欲的で行動力のある生徒が聴講し、中

には学期末に「秀：受講態度、レポートの提出、その内容については申し分ありません」、「良：積極的に発言する熱心でまじめな生徒でした。私共の学科に入学してほしいです」と評価された生徒もいました。高校生といっしょに授業を受けた北大生を対象とした調査からは、昨年度と同様、「よいことである」「よい刺激になる」「授業の活性化につながる」などの好意的な回答が多数を占めました。

高大連携の講義を受講して

永松 美樹

私が今回高大連携で受講しているのは、『脳と行動—生物学的理解とその限界』という科目です。全十四回の授業のうち前半は脳についての知識、つまりは理系の分野の授業。そしてこれから行われる後半の授業では哲学など文系の分野や立場からアプローチをしていきます。



私が今一番面白いと思っているのは、宿題として出されるレポートです。『人間が関わることからの「理解」に共通して必要な視点にはどのようなものがあるのか』『知能的行動とはどのようなものか』など、普段はあまり考えない、でも考え出すと面白いテーマが与えられるのです。ただ提出して終わりというわけではありません。先生が更に深く考えるための助言を一人ひとりに書いてくれます。それを見て、また考えることが出来ます。宿題で出されるテーマは授業に関連していくものなので、考えることは授業を理解するこ

とにおいてとても役に立ちます。

逆に大変なのは、授業です。高校の授業とは異なり、大学の授業は90分休憩なしで行われます。しかも板書はほとんどないため、自分で重要だと思うところをメモしなければなりません。何をどうまとめればいいのか、よく分からなくなってしまう。

また、授業の内容だけではなく、授業を受けることで大学の雰囲気を知ることが出来ることも、高大連携を受講して知ることのできた大きなことです。授業中ふと見回すと、毎回寝ている人もいれば、誰よりも熱心にシャーペンが動いている人もいます。中には授業が終わるとよく先生のところに質問をしに行っている人もいます。その人は私の憧れの大学生さんです。大学に入って、自分の学びたいことを積極的に学んでいけるような学生になりたい。その大学生さんに出会って、私は前より一層そう思えるようになりました。

大学、というところはもう遠い未来の話ではありません。私が本当にやりたいことを学べる大学に入って、存分に学びたい。授業を通して知識ばかりではなく、自分の進路も更に真剣に考えることができ、とても有意義なものとなりました。(まだ終わってませんが。汗)

(札幌旭丘高等学校の『鴻鵠の志』(47期入学生の学年通信、2005年冬季号、12月22日発行)の掲載記事を、筆者及び同校の許可を得て転載しました。)

第2学期終了後に実施した高校生を対象とした調査では、全員が「受講の目的が達成された」と回答し、得られたこととして「大学の様子がわかった」「知的好奇心が高まった」「より高度な知識を得ることができて楽しかった」「このような学問があるのかと驚いた」などを挙げています。受講生の一人、永松美樹さん(当時、札幌旭丘高等学校2年生)は本学の1年次生といっしょに一般教育演習を受講した体験を左記のように綴っています。大学の正規の開講科目を高校生が学期を通して受講する意義と教育効果について、多くの示唆を与えてくれています。

これまでの二回の試行を通じて、高大連携科目の実施上の課題が明らかになりました。さらに、今年度の全学教育科目のカリキュラムや履修条件の改変にともない、新しい環境条件を考慮して「高大連携科目」の提供方法を考える必要が生じています。このため、2006年度第2学期と2007年度第1学期においても、本学における高大連携の目的や意義を明確にしながらか高校生への聴講を試行することになりました。引き続き、高校生の聴講に対して先生方のご助言とご協力をお願い致します。

センター日誌 CENTER EVENTS, March-April

3月

- 2日 ・(会議) 第62回全学教育委員会
- 3日 ・(会議) 平成17年度第4回センター運営委員会
- 8日 ・(会議) 平成17年度第3回教務情報システム専門委員会
 - ・一般選抜前期日程合格発表
 - ・(会議) AO入試部会
- 9日 ・(会議) 第39回教務委員会
- 12日 ・一般選抜後期日程試験
- 22日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- 23日 ・一般選抜後期日程合格発表
 - ・(会議) クラス担任代表会議
 - ・(会議) クラス担任全体会議
- 25日 ・センターニュース64号発行
- 28日 ・(会議) 平成17年度第11回教育改革室会議

4月

- 5日 ・(行事) TA研修会
- 6日 ・(行事) 新入生オリエンテーション
- 7日 ・(行事) 入学式
- 10日 ・(行事) 学部ガイダンス
- 11日 ・第1学期授業開始
 - ・(会議) AO入試部会
- 19日 ・(会議) 平成18年度第1回教育改革室会議
 - ・(会議) 平成18年度第1回センター長連絡会
- 21日 ・(会議) 第5回今後の外国語教育の在り方検討WG
- 25日 ・(会議) 第7回学部教育・大学院教育検討WG
 - ・(訪問) 八雲高校
- 26日 ・(会議) 平成18年度第1回センター運営委員会
- 28日 ・(会議) 第63回全学教育委員会

センターニュース 2006, No. 65 目次

<巻頭言>

地域連携の新たな局面と大学の生涯学習機能
町井 輝久…………… 1

GPA・上限設定・成績評価等について
岡部 洋實…………… 4

全学教育委員会報告…………… 5

TA 研修会開催される

—ほとんどの参加者が修了認定—……………11

北海道大学公開講座の日程決まる

「くらしを守る—安全と安心の科学—」……………15

今年度も高校生の全学教育科目聴講を試行……………16

センター日誌……………17

目次・行事予定・編集後記……………18

行事予定 SCHEDULE, June - October

	【日 (曜日)】	【行事】	【備考】
6月	1(木)	開学記念行事日	休講
	1(木)～4(日)	大学祭	休講
7月	18(火)及び25(火)～26(水)	補講日	
	28(金)	第1学期授業了	
	31(月)～8月10(木)	定期試験	
8月	11(金)～15(火)	追試験	
	11(金)～9月29(金)	夏季休業日	
	24(木)正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬～下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
	25(月)～29(金)	集中講義期間	
10月	2(月)	第2学期授業開始	
	11(水)～12(木)	1年次履修届受付	
	11(水)～12(木)	2年次以上履修届受付	当該学部
	12(木)	追加認定試験成績締切	

編集後記

GPAの本格利用と履修登録単位数の上限設定は、学生だけではなく教職員にも大きな変化をもたらしたようです。必修科目を受ける学生の態度が例年に比べてより真摯になってきました。一方で、選択科目は受講者が減少しているようです。単位の実質化が本当に実現できたかどうか、問われるところです。岡部先生の記事は多くの全学教育担当教員が同感するのではないのでしょうか。上記2つの設定は教育改革の歯車の一部であり、ひとつも外すことはできません。この制度の中で、学生の学習環境が少しでもよくなるよう、さらなる改良改革が期待されます。(歳)

センターニュース 第65号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2006年5月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・木村 純・町井輝久

安藤 厚・川初清典・山岸みどり・鈴木 誠

池田文人・亀野 淳

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>